

Ⅲ 令和7年度親子読書研修会 椋鳩十生誕120周年記念大会

1 概要

(1) テーマ

「椋鳩十と親子読書 65年のあゆみ」

(2) 日時

令和7年6月29日（日）13:00～15:55

(3) 会場

カクイックス交流センター 県民ホール

(4) 内容

ア 「おやこ一冊読書と椋鳩十氏の功績」について

イ 「おやこ一冊読書」取組発表・実演

さつま町立鶴田小学校PTA『いもむしの会』

ウ 講演

講師 久保田 里花 氏（児童文学作家・椋鳩十研究家）

演題 「本は生きる力～椋鳩十の思いをつないで～」

2 「おやこ一冊読書」と「椋鳩十の功績」について

(1) 「おやこ一冊読書」について

「おやこ一冊読書」とは、一冊の本を親と子が一緒に読み味わう読書の方法である。取り組むことによって、親子の絆が深まり、一冊の本をじっくりと読む習慣が身に付くことが期待される。取り組み方としては、「一緒に20分程度、本を楽しむ」「思い出の本を薦めてみる」「親も読んでみる」「本をプレゼントしてみる」などが挙げられる。

「おやこ一冊読書」で読み味わった本は、親子の絆を深め、感動を味わい、自分を見つめる大切な一冊の「宝本」となる。



(2) 「椋鳩十の功績」について

「読書を通じて子どもたちに立体的な影響をあたえ、さらに家庭内にもよりよい変化を起こしたい」との思いを持っていた椋鳩十は、「理解力や鑑賞の力の向上」「知的消化不良の治療・知的な力を伸ばす」「漫画やテレビを乗り越える」「母と子の心の距離を近づける」「その他、子どもの根気力の問題、偏読の治療」などの様々な問題に効果があると期待して「親子20分間読書運動」を始めた。

昭和34年に宮之城町立流水小学校の堀内 徹校長の協力を得て、1年間試行し、「テレビを見に行く数が減った」「マンガとちがったおもしろ味を知り始めた」など、一定の成果を得た。昭和55年5月5日、子どもの日を期して「母と子の20分間読書運動」としてスタートしたこの運動は、「子どもが20分くらい、教科書以外の本を小さな声で読む」「母がそばにすわって、静かに、できるだけ毎日聞く」という取り組みやすいものだった。

流水小学校での取組結果は、県下の全新聞やテレビ、ラジオ等で大々的に発表された。また、椋鳩十は部下の職員に学校やPTA、その他の団体へその効果を積極的に伝えさせ、この運動の普及に努めた。マスコミの効果的な活用と地道な対面説得により、「親子20分間運動」は県内だけでなく、全国各地へと広がっていった。

この「親子20分間読書運動」は、その後、「幼児に本を読んであげましょう運動」や「鹿児島の子ども朝読み・夕読み事業」「心も育てる本も友達20分間運動」などの取組を経て、現在の「おやこ一冊読書」「1日20分読書」「宝本」の取組へとつながっている。

椋鳩十は、図書館長として親子読書の推進だけでなく、追放図書保存や配本システムの構築などに寄与するとともに、作家としては、優れた文学作品を

数多く輩出するだけでなく、県内外の多くの校歌や社歌などを作詞するなど、幅広い功績を残した。

3 「おやこ一冊読書」取組発表、実演

さつま町立鶴田小学校PTA『いもむしの会』



平成6年に宮之城町立流水小学校の親子読書サークルとして活動をスタートし、今年度活動継続31年目を迎えた。

当日は、まず、「母と子の20分間読書」の先駆けとなった流水小学校と椋嶋十先生のエピソードや、その後の読書活動の取組の様子について発表した。



実演発表では、「はらぺこあおむし」のエプロンシアターと、さつま町の中学生が制作した、地元を題材にした紙芝居「ゆうとくんの不思議な旅」を披露した。エプロンシアターは話者と演者を分担し、紙芝居はスクリーンにも投映してパソコン操作と演者を分担するなど、5人の会員が役割分担して実演を行った。

4 講演

講師 久保田 里花 氏（児童文学作家・椋嶋十研究家）
演題 「本は生きる力～椋嶋十の思いをつないで～」



椋嶋十氏の孫であり、児童文学作家、椋嶋十研究家である久保田 里花 氏が、椋嶋十の生い立ちや作家として活躍した様子、図書館長としての功績などについて講演した。伝記などにも載せていない、孫として一緒に過ごした日々の中での思い出なども交えながら、聴衆を惹きつける講演となった。